歴史文化クラブ６月研修会資料Ⅰ

継体天皇とその時代

岩本　次郎

１、文献資料が伝える継体天皇の生涯　　＊特記せぬ限り日本書紀による、（　）は岩本の注記

① 男大迹天皇（継体天皇）またの名は彦太尊、誉田天皇（応神）の五世の孫、彦主人王の子。
母は振媛、振媛は活目天皇（垂仁）七世の孫なり。
彦主人王は振媛が顔容姝妙にして、嫩色ありと聞き、近江国高島郡の三尾別業より、使いを遣わして、三国（福井県坂井郡）の坂中井に迎え、召し入れて妃とし、遂に天皇を産みたまう。天皇の幼年にして父王薨ず、振媛歎きて「われ、高向越前国の邑名なり、に帰寧して天皇を養い奉る」という。
天皇５７歳のとき（崩年干支辛亥の８２歳とするのを信じると西暦５０６年に当る）、小泊瀬天皇（武烈）崩御す。男女子無く、継嗣絶ゆ。（以下、年表風に記す。）

② 翌５０７年正月４日、大伴金村、男大迹天皇の擁立を提案、６日、三国に迎える。
１２日、樟葉宮に至る。２月４日、即位、大連に金村と物部麁鹿火、大臣に巨勢男人を任ず。
１０日、手白香皇女を立后。３月１日、手白香皇女を迎える。５日、皇后を立つ。１４日、妃を定める（次章参照）。
５１１年１０月。山背筒城に遷都。
翌５１２年２月、金村奏上して、任那四県（上哆唎、下哆唎、娑陀・牟婁）を百済に割譲（時の百済王は武寧王）。
513 年 6 月、百済が五経博士段楊爾を貢る。
9 月、勾大兄皇子（のちの安閑天皇）、仁賢と糠君娘（和邇臣日爪の娘）との間の子春日皇女を娶る。12 月 8 日、勾大兄皇子を春宮とする。514 年正月、太子妃春日皇女に匝布屯倉を賜う。516 年 9 月、五経博士漢高安茂に交替する。
518 年 3 月 9 日、弟国に遷都。526 年 9 月 18 日。磐余玉穂に遷都。

③ 527 年 6 月 3 日、近江毛野臣、任那に出兵せんとするも、筑紫国造磐井、新羅と結託し、これを妨害する。8 月 1 日、物部麁鹿火らを遣わし鎮圧せんとする。528 年 11 月 11 日、物部麁鹿火が磐井を御井郡に切る（筑紫風土記逸文）。12 月、筑紫君葛子、糟屋屯倉を献上。

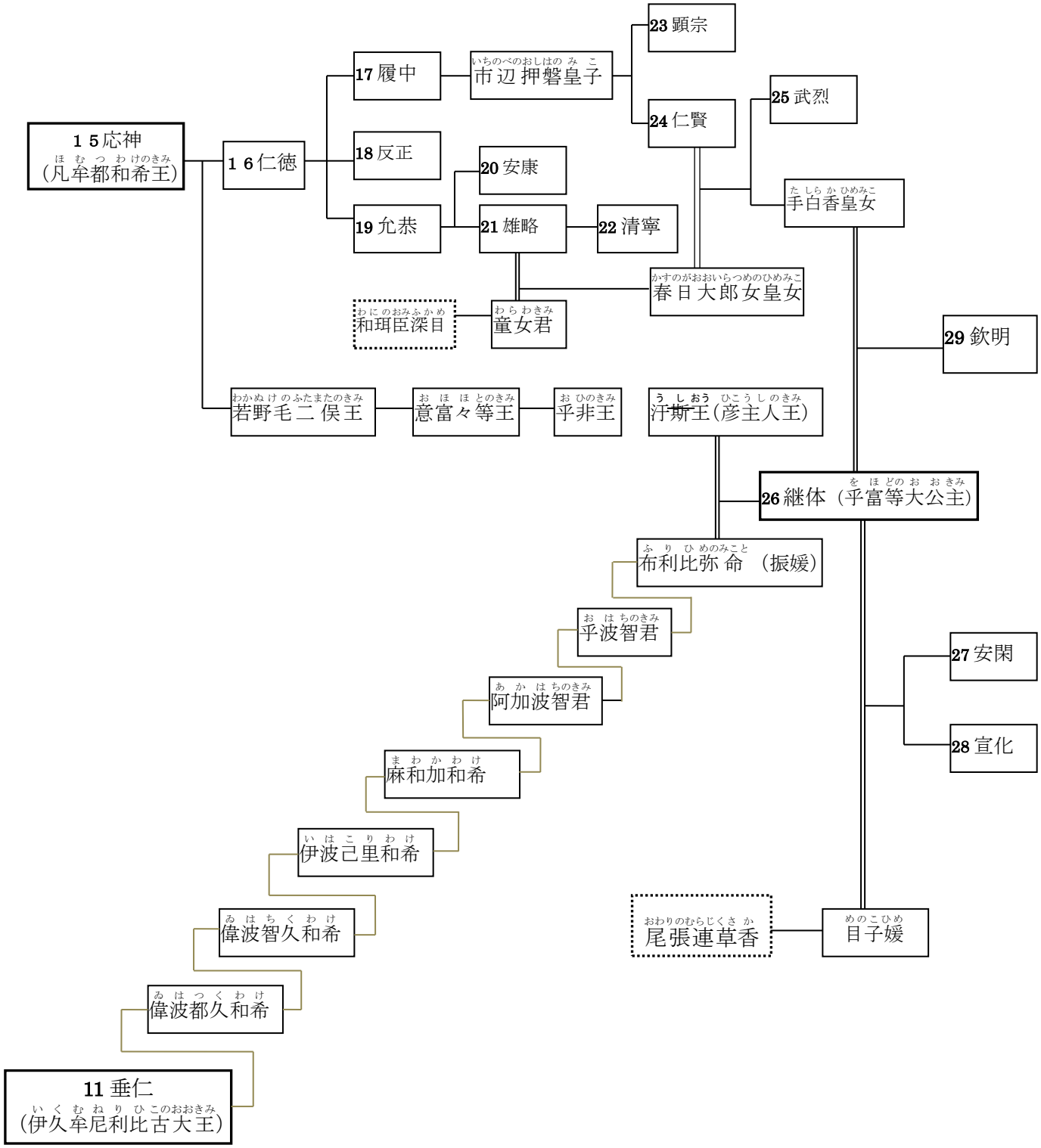
④ 531 年 2 月、天皇病になる。7 日に磐余玉穂宮に崩御（日本書紀所引百済本記）。12 月 5 日藍野陵に葬る。ただし、古事記は丁未年（527）、書紀或本は甲寅年（534）に崩御とする。

別表　：　継体天皇関係略系譜

別表

継体天皇関係略系図

（日本書紀・釈日本紀所引上宮記による）



2　婚姻関係から推察される継体天皇の勢力圏

① 古事記が伝える后妃と子、

1 三尾君らの祖、若比売（男王 1、女王 1）
2 尾張連らの祖、凡連（おほしのむらじ）の妹、目子郎女（めのこのいらつめ）（男王 2）
3 意富祁（おほけ）天皇(仁賢)の御子、大后手白髪命（男王 1）
4 息長（おきながの）真手王（まてのきみ）の娘、麻組（をくみ）郎女(女王 1)
5 坂田大俣王の娘、黒比売(女王 3)
6 茨田連小望（うまらたのむらじこもち）の娘、関比売(女王 3)
7 三尾君加多夫の妹、倭比売（男王 2、女王 2）
8 阿倍之波延（あへのはえ）比売、（男王 1、女王 2）

計　后妃 8 人、男王 7 人、女王 12 人

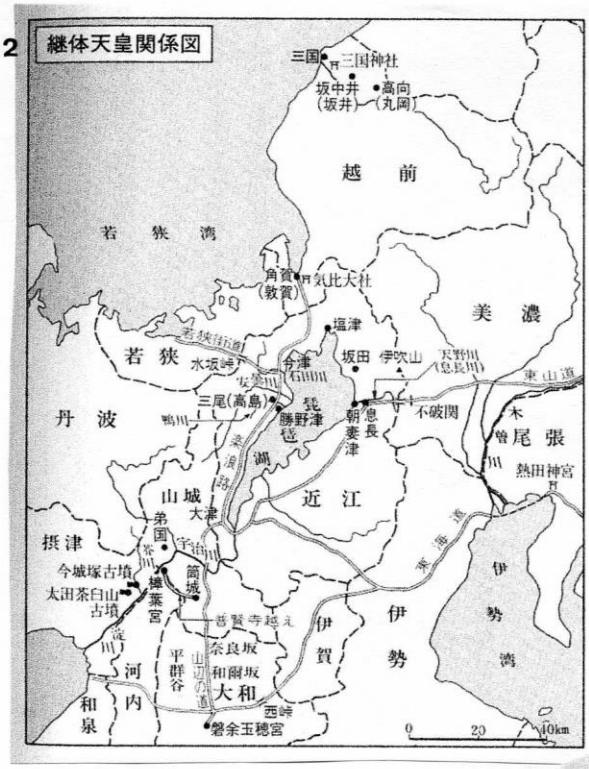
② 日本書紀が伝える后妃と子

◎皇后手白香皇女（男王 1）

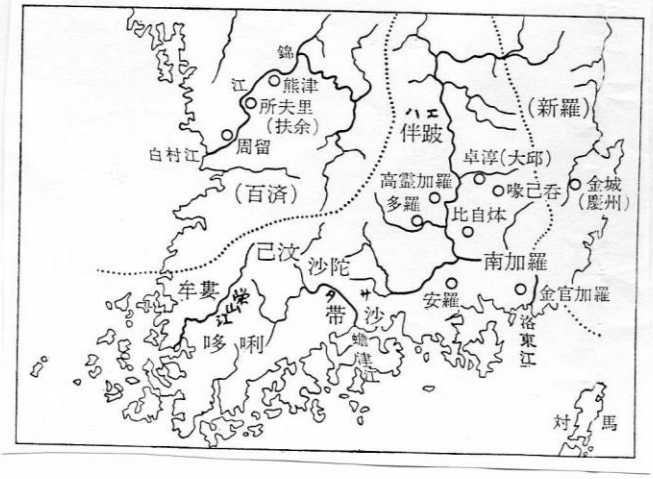
1 尾張連草香の娘、目子媛（男王 2）
2 三尾角折君の妹、稚子媛（男王 1、女王 1）
3 坂田大跨王の娘、広媛（女王 3）
4 息長真手王の娘、麻組郎子（女王 1）
5 茨田連小望の娘、関比売（女王 3）
6 三尾君堅槭（かたひ）の娘、倭媛（男王 2、女王 2）
7 和珥臣河内の娘、荑媛（はえひめ）（男王 1、女王 2）
8 根王の娘、広媛（男王 2）

計　后妃 9 人、男王 9 人、女王 12 人

2 継体天皇関係図



3 朝鮮南部（┈は475年ごろの領域界）



4 隅田八幡神社所蔵人物画像鏡銘

「癸未年八月日十大王年男弟王、在意柴沙加宮時、斯麻念長寿、遣開中費直穢人、今州利二人等、取白上同二百旱、作此竟」

（備考）癸未年は四四三年、または五〇三年。文中の「男弟王」を男大迹王（継体天皇）とみれば継体の在位年代（五〇七―五三一）に近いのは五〇三年であり、また「意柴沙加宮」を允恭天皇の皇后忍坂大中姫が住んだ忍坂宮だとすれば、允恭天皇の在位年代（書紀では四一一―四五三）に相当する四四三年が正しいことになる。男大迹（ヲホド）を男弟（ヲヲト）にあてることには音韻上難があり、鏡そのものの年代の考古学的研究からも、四四三年の方が妥当であろう。なお文中の「斯麻」を百済の斯麻王（武寧王。五〇一―五二三在位）にあてる見解（山尾幸久）もある。

隅田八幡神社人物画像鏡（和歌山）　もとは古墳の副葬品であったとも考えられ，中国鏡を模してわが国で鋳造した鏡。48文字が陽鋳（ようちゅう）され，鏡の由来が記されている。癸未年については443年説と503年説に分かれている。

３　継体天皇に関わる謎

①　上宮記逸文の資料的価値

ヤマトにやって来た北方の豪族を正当化するための潤色とする説と
文章などが古体であり、信用できるとする説　あり。

②　相次ぐ遷都

大伴氏以外の豪族の抵抗に遭ったためとする説
淀川中流両岸に勢力を扶植・拡大するためとする説。

③　男弟王と男大迹王

隅田八幡神社所蔵人物画面鏡銘の「癸未年」は　４４３年か、５０３年か

④　国造磐井は反乱したのか

岩戸山古墳の様相から推して、九州王権とも呼ぶべき存在。
倭王権の勢力圏にある一地方豪族か。

⑤　崩御干支の異同問題　（下記　注）

いわゆる継体－欽明期の内乱はあったのか、無かったのか。

⑥　藍野陵は今城塚か

延喜式　三嶋藍野陵　磐余玉穂宮御宇継体天皇、在摂津国嶋上郡、兆域東西三町、
南北三町、守戸五烟、

今城塚古墳（大阪府高槻市郡家新町）　全長１８１ｍ（外堀を含めると３５４ｍ）
太田茶臼山古墳（大阪府茨木市太田３丁目）現継体陵、全長２２６ｍ（外堀を含めると３２０ｍ）

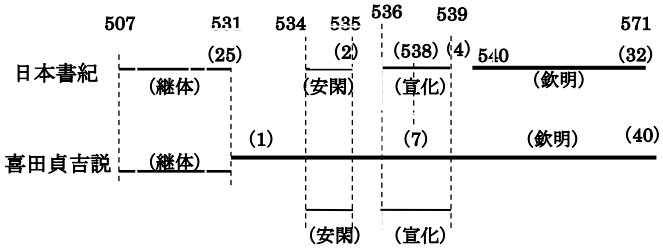
---

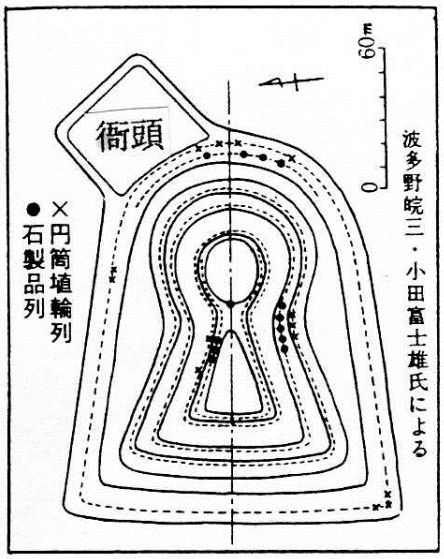
⑤注１　継体～欽明皇位継承年代表

・異説のうち、帝説とは『上宮聖徳法王帝説』
縁起とは『元興寺縁起』の略

西暦（干支）	日本書紀	異　説
５２７（丁未）		継体死（古事記）
５３１（辛亥）	継体２５　継体死	欽明即位（帝説）
５３２	} 空位	欽明　元（帝説）
５３３		
５３４（甲寅）	安閑　元	継体死（書紀或本）
５３５	〃　２	安閑死（古事記）
５３６	宣化　元	
５３７	〃　２	
５３８（戊午）	〃　３	欽明　７（縁起）
５３９	〃　４	
５４０	欽明　元	
５７１（辛卯）	〃　３２　欽明死	欽明４１　欽明死（帝説）

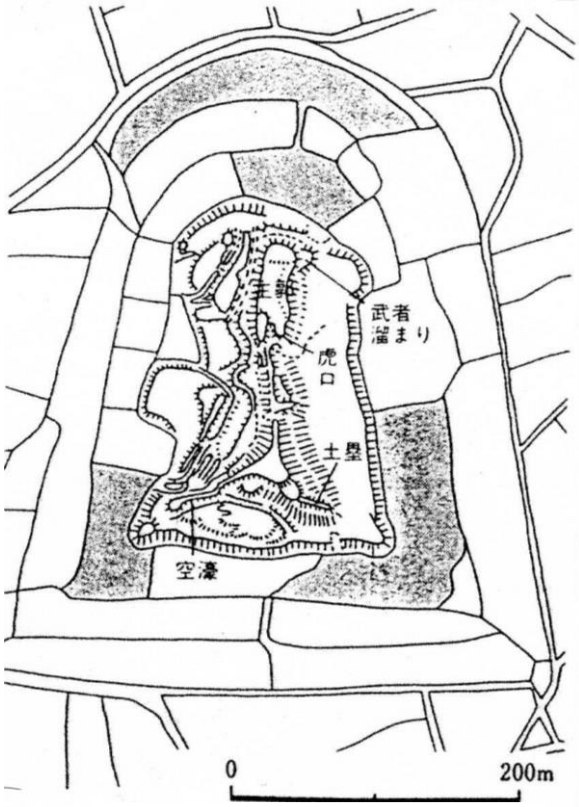
⑤注２　欽明vs安閑・宣化の二朝対立想定図





岩戸山古墳
埴輪・石製品配列推定図

茨木市
太田茶臼山古墳（現、継体天皇藍野陵）



今城塚古墳に残る中世城砦

歴史文化クラブ６月研修会資料　Ⅱ

「継体天皇の時代」(高槻市教育委員会編)、
「今城塚資料館常設展示図録」より作成

三島の古墳群について

山背盆地の水を集めて大阪湾にそそぐ淀川水系は、古来よりの物流の大動脈であった。淀川の下流の北岸にあって、東西を天王山と千里丘陵、北を北摂山地で限られたこの一角は、古来、三島（みしま）と呼ばれてきた（大宝律令（７０１年）施行後は、三島の東が嶋上郡、西が嶋下郡となる)。

淀川の要衝を占める三島は、歴史の表舞台にしばしば登場するが、３世紀から７世紀の古墳時代にかけて数多くの遺跡が残る。

① 邪馬台国時代の三島　・・・・　３世紀前半の「安満宮山古墳」

３世紀中頃の邪馬台国の時代に箸墓を始めとする前方後円墳が出現する。その直前に造られた「安満宮山古墳」。淀川と大阪平野を一望する安満山の中腹に造られた三島古墳群で最古の古墳（長方形墳）である。魏の年号の青竜３年（２３５年）の銘のある鏡（方格規矩四神鏡　国の重文）が発見され、ここに眠る人物は、安満集落の王で女王卑弥呼が魏に派遣した使節団の一員で、卑弥呼よりこの鏡を下賜されたのではないかと推測する人もいる。

② 倭の五王の時代　・・・・　「太田茶臼山古墳」

４世紀末以降、応神～雄略天皇の時代のヤマト王権は、軍事力を背景に倭国の統一を進める。軍事・経済力を支える朝鮮半島の鉄資源を確保するため、倭の大王は中国に使いを送り、半島での影響力を高めようとする（倭の五王時代)。三島の古墳でも刀槍・弓矢などの武器や甲冑・盾の武具の副葬品が目立つようになり、王の武人的性格の強まったことを物語る。

５世紀の中頃、突如として三島に、墳丘２２６ｍ、総長 320mの巨大な大王クラスの「太田茶臼山古墳」が築かれる。宮内庁は「継体天皇三嶋藍野陵」に比定するが、古墳年代とは合致しない。応神天皇の皇子の「若野毛二俣王」あるいはその子「意富々等王」に擬する説がある。

この古墳の埴輪を作るために、一大埴輪工場が開かれる「新池遺跡」。この埴輪工場には工人住居跡も見つかっており、約１００年に亘り続けられ三島の古墳に埴輪を供給続けたとされる。

③ 継体天皇の時代　・・・・　「今城塚古墳」

６世紀前半、太田茶臼山古墳を上回る規模の今城塚古墳が作られる。全長１８１ｍの墳丘、２重の濠に囲まれ、前方部２段、後円部３段、くびれ部両側に造出を備え、総長 354mの規模はこの時期では最大。大王墓にふさわしい古墳で、継体天皇陵とするのが定説である。

墓は生前に設計・築造された寿陵と言われ、淀川水系の要衝のこの地を重視した被葬者の想いが窺われる。

a、埴輪の船絵　　埴輪については別資料「埴輪について」参照
使用された埴輪は円筒埴輪と朝顔形埴輪など６０００本と推定され、すべてが新池埴輪工場で作られている。円筒埴輪には、２本マストに２本の碇綱のある船絵がヘラ描きされ、港に停泊する大型帆船の情景を現している。

ｂ、３つの家形石棺
３種類の石棺の破片が見つかり、３基の家形石棺と判明している。使われた石材は九州阿蘇のピンク石、兵庫の竜山石、二上山の白石で、広範な地域から資材と労働力を集めたことが判る。

ｃ、埴輪祭祀場
今城塚古墳の最大の特徴として、内堤の北側に６０ｍにわたって張り出しが設置され、４区の祭祀場が設けられ、２００点以上の精巧な埴輪による古代王権の壮大な祭祀儀礼を示している。

④ 継体天皇と三島藍野陵

後継者の無い武烈天皇の死によって、王統の断絶という事態に瀕して。大和朝廷は、応神天皇５代の孫と言われる男大迹（ヲホド）王を擁立する。男大迹（ヲホド）王は仁賢天皇の娘の手白香皇女を娶って樟葉宮で即位する（継体天皇）。

以後２０年に亘って継体天皇は、淀川流域の樟葉、筒城、弟訓に都を営むことになる。水運の大動脈の淀川水系を王権の基軸に据え、父母の地である近江、越の勢力や、尾張、河内、大和の豪族から妃を娶ることで勢力範囲を広げた後、満を持して大和の磐余玉穂宮へ入る。

その翌年の２１年、朝鮮半島で伽耶をめぐって百済、新羅が争う中、朝鮮へ出兵するが、筑紫君磐井が新羅と結んで反乱を起こしてこれを妨害し、ヤマト政権は最大の危機を迎える。その背景には、雄略天皇の没後、それまでの強権的支配への反動と、雄略天皇以後の後継者問題から中央政権の力の低下が地方豪族の大規模な反乱につながったと言える。

しかし、ここでヤマト政権を支える大伴・物部・巨勢の有力首長が結束し、物部麁鹿火を大将軍として派遣し、数年かけて磐井を討伐する。その子の葛子に糟谷部を献上させて屯倉（直轄地）とする。その後も北関東の毛野国造の反乱に対しても力で圧倒し、これらの土地に数多くの屯倉（直轄地）を置くことにより、ヤマト政権の国内の支配体制は再び強化されていきます。

５３１年継体天皇は病気のため磐余玉穂宮で亡くなる。その年齢を日本書紀では８２歳、古事記では４３歳とするが、どちらの資料も三島の藍野陵に葬られたとしている。継体天皇が長年の勢力基盤とした琵琶湖・淀川流域の中で、特に淀川北岸の三島の地を選んだのは、死後も安らかに守られる場所としてこの地を重視していたからであろう。

（古川　祐司　記）

付表１

三島の地の主な古墳（群）一覧　（時代順）

① 安満宮山古墳　（長方形墳）

3 世紀前半の長方形墳。淀川と大阪平野を一望する安満山の中腹にある三島古墳群最古の古墳。魏の年号の青竜３年（２３５年）の銘のある鏡、方格規矩四神鏡（国の重文）及び４枚の三角縁神獣鏡が発見された。安満集落の王の墓とされる。

② 岡本山古墳　（前方後円墳）

3 世紀後半、古墳時代初期。三島地方最初の王墓。全長約 120m、後円部径約 70m

③弁天山古墳（前方後円墳）

3 世紀末～4 世紀初頭、古墳時代初期。三島の王の王墓。全長約 100m、後円部径約 70m。

④闘鶏山古墳（前方後円墳）　国の史跡

4 世紀前半、古墳時代前期。全長 86.4m、後円部径約 60m。

⑤ 郡家車塚古墳（前方後円墳）

4 世紀末、古墳時代前期。三島地方の王墓。全長が約 85.6m、後円部径約 51.3m。

⑥ 新池埴輪製作遺跡　国の史跡

5 世紀中頃～6 世紀中頃まで約 100 年間操業していた、日本最古最大級の埴輪生産遺跡。

⑦太田茶臼山古墳　継体天皇稜（宮内庁所管）

5 世紀中頃～後半、古墳時代中期。総長 320m・総幅約 150m の前方後円墳。

⑦ 今城塚古墳　国の史跡　真の継体天皇陵といわれる（文化庁所管）

6 世紀前半、古墳時代後期。総長約 354m・総幅約 340m の前方後円墳。淀川流域最大の墳墓。

⑨塚原古墳群

6 世紀中頃～7 世紀中頃。かつては 15 群・約 110 基を数えたが、現在では約 40 基が残る。塚原八十塚と呼ばれ、ウイリアム・ゴーランドによって世界に紹介された。

⑩塚脇古墳群

6 世紀後半～7 世紀。約 50 基の古墳で構成されている。

⑪ 安満古墳群

6 世紀後半～7 世紀の群衆墳。40 数基の横穴式石室をもつ古墳が確認されている。

⑫ 阿武山古墳　国の史跡

7 世紀末、古墳時代終末期の古墳。盛り土はなく、直径 82m の円墳。藤原鎌足の墓とする説あり。

６月研修会資料　Ⅲ

埴輪について

歴文研修会で古墳を見る機会が多くあります、古墳の周囲に並べられる埴輪について調べました。

平成２５年５月　　坂東久平　記

１．埴輪の種類

埴輪は日本の古墳時代特有の素焼の土器で、古墳の墳丘・堤・造り出しなどに並べられました。（中国の墓室に納められた俑（よう）と異なります）

最初に「円筒埴輪」が出現し、次いで具象的な各種の「形象埴輪」が作られましたが、前方後円墳と共に６世紀に消滅しました。

「円筒埴輪」:

円筒埴輪・・・古墳時代 前期初頭（３～４世紀）

「形象埴輪」:

器財埴輪・・・古墳時代 前期後半（４世紀後半）

動物埴輪・・・古墳時代 前期後半（４世紀後半）：鶏

古墳時代 中期　　（５世紀）：馬、犬、猪

家形埴輪・・・古墳時代 前期後半（４世紀後半）

人物埴輪・・・古墳時代 中期　　（５世紀）

２．円筒埴輪の起源

日本書紀によると「垂仁天皇の皇后・日葉酢媛の造墓の際、殉死に代えて粘土（埴＝はに）で人馬をかたどったものを陵墓に立てた」とありますが、実際には人物埴輪より円筒埴輪の出現が早いことがわかっており、土師氏の祖先を顕彰するための造作のようです。

埴輪の起源は弥生時代末期に吉備で首長の墓である弥生墳丘墓に供えられた「特殊器台」と「特殊壺」です。これは被葬者に供物を捧げる、葬送儀礼の土器と考えられています。

これが古墳出現期に大和に採り入れられ、「円筒埴輪」「朝顔形埴輪」に変化しました。

３．円筒埴輪

円筒埴輪は下部の一部を土の中に埋め、高さを揃えながら古墳の回りや中段を取り囲むように並べられました。

大量の円筒埴輪は墳丘の崩れを防止し、墓域と生活の場を区別していたと考えられます。

＊日本最大の円筒埴輪

桜井市のメスリ山古墳（４世紀中頃）から出土しました。高さ：２４２ｃｍ、直径：９０ｃｍ

＊円筒埴輪の変遷

誉田御廟山古墳（応神天皇陵）：１７，０００基の円筒埴輪、（木製蓋５００基）

大山古墳（仁徳天皇陵）：２万～３万基の円筒埴輪、次第に小型化

土師ニサンザイ古墳：円筒のサイズが１／２、（反正天皇陵かも）

４．形象埴輪

４－１．家形埴輪

祭殿、住居、倉庫など当時に使用されていた家の形を埴輪にしたもの。

（御所市の室宮山古墳の家形埴輪は有名）

４－２．器財埴輪

武器、武具、蓋（きぬがさ）、盾、甲冑など。被葬者の身分や悪霊の進入防止のため。

４－３．動物埴輪

鶏が初期から登場、儀礼の際朝を告げる鳥、馬は５世紀に朝鮮から輸入され貴人のステータスシンボルとして珍重された。

４－４．人物埴輪

貴人、巫女、力士、武人などいろいろで、イレズミをしたものもある。

＊形象埴輪の役割は、初期には被葬者を守る意味がありました。５世紀以降は儀礼の様子を再現し、跡継ぎの支配者の権威を示す政治的な意味合いを持っていました。

（四条古墳や今城塚古墳など）

５．さまざまな埴輪

（１）円筒埴輪

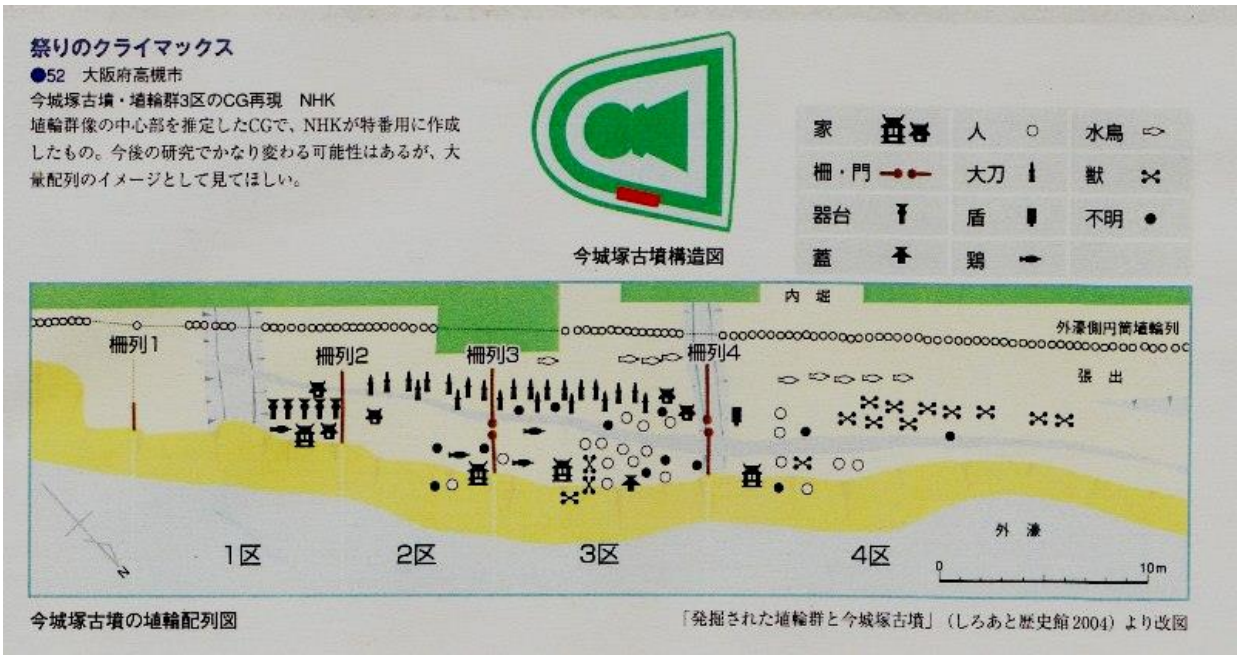
（２）家形埴輪

（３）器財埴輪

（４）人物埴輪

（５）動物埴輪

（６）今城塚古墳の埴輪配置

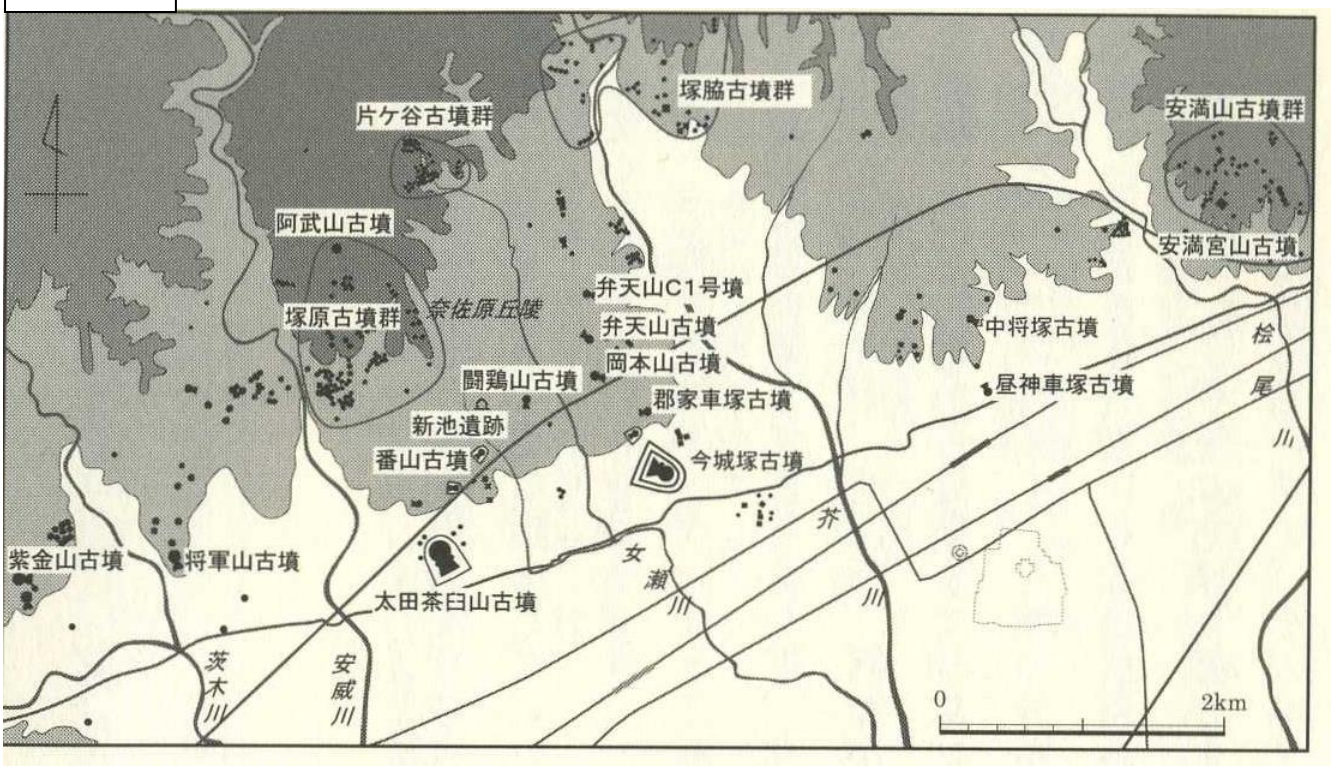
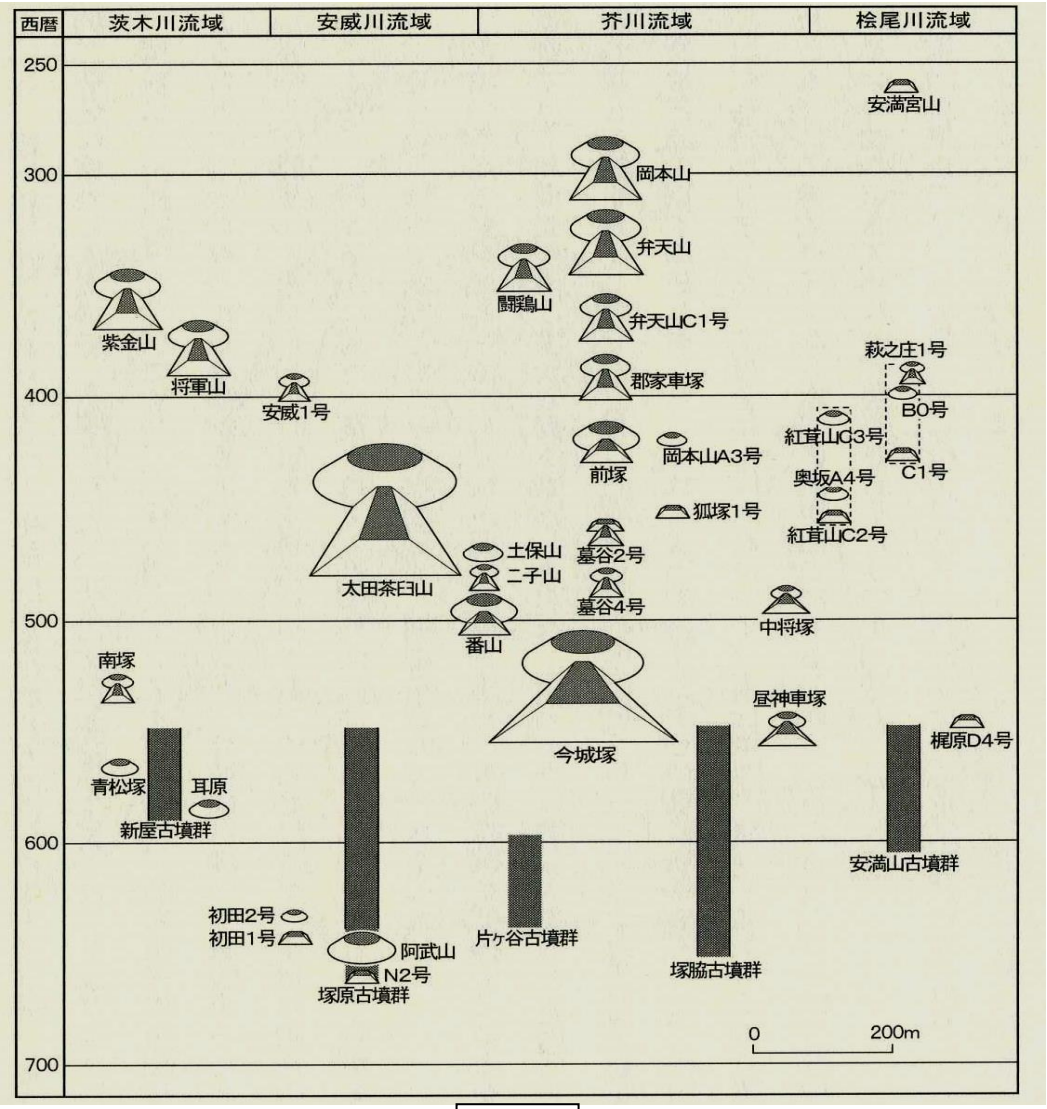


（７）四条古墳の儀礼

古墳の儀礼

付表Ⅱ

三島の古墳分布図



三島地域の古墳編年